〈1〉

昭和の幼稚園の歩み

群馬大学教育学部附属幼稚園

昭和初期および戦時中の幼稚園の姿を書くようにと編集部からの御依頼がありました。当園の誕生はちょうど昭和の初期で、名称も昭和幼稚園として発足いたしました。当園の歴史をかくことは、そのまま昭和の幼稚園の歩みという標題にもつながるものと思われますので、当時の関係者の方々に資料を提供していただいて、この記事をまとめました。

創立当時をふりかえって

創立当時つとめさせていただいた者として、当時をふりかえってみようと思います。

開園いたしましたのは、昭和七年五月二十五日、私立昭和幼稚園として発足いたしました。園児数は、一年保育二組で男女計百四名、二年保育は男女計三十七名、現在では考えられないほどの多い園児数でした。

これは、当時は止むを得なかったことなのでしょう。保育料は、一カ月二円、現在考えると、うそのような話です。

教職員は藤見睦治園長、中島房子主任保姆、桜井まさ保姆、萱野カツ保姆と私の五名でした。保姆の三名はその春誕生したばかりでした。今思えば、なんと可愛らしい先生たちであったことでしょう。

園舎も、施設も、園児も、教師もすべてが一年生でした。それだけに大きな希望と喜びに胸ふくらませ、職員は苦楽を共に一つとなって、教育にあたっておりました。

園舎は、当時県内では唯一のモダンな園舎でありました。特に新しい試みとして、各保育室の南前方に作られたベランダがありました。このベランダは各部屋と通じ、保育室から上履のまま出

られます。そして日当りのよい遊び場となりました。その頃の園舎としては誠に新しい考えでありました。

群馬県内の幼稚園の多くが、新しい施設に関心を示し、保育室の延長として、ベランダをとり入れるようになったのも、このころからであります。当時ここまで考えられた、関係者の方々に心から感謝したいと思います。

園舎はできましたものの、園庭はトタン塀に囲まれ庭木一本ありませんでした。

遊具といえば、縄ブランコが八つ、砂場に円木だけでした。保育室には、机・椅子・整理戸棚・弁当入れ・黒板にオルガン位で遊具は何もありませんでした。やはり新設の苦労を教師も園児も共に受けたのであります。

しかし幸せだったことは、自然に恵まれた環境があったことであります。門から外へ一歩出ますと、道路の両側には、前橋でも有名な桜並木がつづいていました。夏には涼しい木陰となり、春にはすばらしい花のトンネル、秋には美しい紅葉となって、ままごと、首かざり、製作など、つぎつぎと子どもたちに楽しい遊びを与えてくれました。

東の田圃に出ますと、前方に雄大な赤城山がひらけ、遠くには榛名山、澄みきった青空の下で、つみ草、虫とり、兵隊ごっこ、ままごと、おにごっこなど、四季折々のよき遊び場がありました。

現在ふりかえってみますと、あの頃の子どもたちは、美しい自然の中で育っていったとも、いえるような気がいたします。

終日保育

当時このような保育は、県内の幼稚園でははじめての試みではなかったでしょうか。

普通園児がかえった後、つづいて終日保育が行なわれるのです。主として忙しく手の足りない商業家庭の子どもが多く、中に、共働きの教員家庭の子どもが何人かいたように覚えています。三時半頃から四時頃までおり、毎日おやつをあたえます。おやつ代は一ヶ月一円位でした。その頃の子どもたちにとって何より楽しみの一つでありました。

人数は当時の記録によりますと、全園児百五十名のうち、申込者四十二名位でした。

子どもたちは終日保育を「お残り」と呼び、「僕はお残りだよ、私はお残りよ」といってとても喜んでおりました。普通保育児の中には、うらやましそうにかえっていく姿もみられました。夏は遊戯室にござをひき、子ども用の毛布で体をくるみ、枕をならべてひるねをします。冬は火鉢を中に入れた大きなやぐらこたつを囲み、お話しをしたのもなつかしい思出の一つであります。

その頃の子どもたちも、現在の子どもたちと変わりなく、自分

たちで遊びを作りだしていきました。例えば、遊戯室にある子ども用の長椅子を使い、みんなで協力しあって積みあげて遊びます。それは、あるときは子どものお城となり、あるときは大きな軍艦となり、あるときは飛行機となりました。これらの遊びから、またつぎつぎと遊びが展開されていきました。教師は子どもたちの協力の力と、創意工夫に驚き、目をみはることがたびたびありました。

こうして終日保育を終えた子どもたちは家路へと向かいます。子どもたちを無事かえし、後片づけをすませほっとすると、いつも五時を過ぎております。それから事務整理と明日の準備をします。

園の門を出るときには、すでに外はまっくらです。明るい道をかえったことをあまり覚えておりません。

それは一言でいえば、文字通り子どもたちと共にあけ、子どもたちと共にくれた日々でありました。

（小見はる江記）

当時の園児として

道添いに高く枝を交した桜のトンネル。大谷石作りの門を入ると、白いアーケに咲きほこるバラ。ベランダのコスモス。

幼稚園時代の思い出は、さまざまな花の香と共に甦ってまいります。

昭和十一年、十二年頃は、まだまだ良き時代であったのかもしれません。園の持つなごやかでゆたかな雰囲気が、当時園児だった私に花の園の印象を深く刻みつけたものとおもわれます。

私にとって幼稚園時代は、温かく伸びやかで、最も充実した心のふるさとです。

幼児なりに園の行き方を体得した私は、幼稚園に魅せられ、いつの間にか当然の道のように教職の方向に歩み出してしまったのです。そして幼稚園時代の経験のかずかずが、教師となっての現在、役立っている面が非常に多いのです。

四月入園当初の園児に接しつつ、きのうのように甦って来ることがございます。

入園したばかりの私が、一人でたいこ橋に所在なくもたれかかっておりました。少し離れたブランコで、一つ上級の女の子が三、四人、先生と楽しそうに語り合っておりました。そのようすを見ていると、自分がますます小さくなっていくような心細い気持ちになったのです。すると、「かずこちゃん、いらっしゃい」と、ブランコから柔かい声がかかりました。続いて「かずこちゃん、いらっしゃい」と、三、四人の女の子の声。

私の悄然としていた気持ちが、にわかに活気づいてまいりました。救われたような気がしたのです。私はなおも黙ってたいこ橋

にもたれかかっていましたが、前とは比べものにならない程、明るい気持ちにかわっていました。

ただ、それだけのことが、今もなおはっきりと、きのうのように懐かしく感じられます。

教師になった今でも、一人ぽつんとしている子を見ると、ふとあの時のことが脳裏に浮んできます。そして、「○○ちゃん」と声をかけるのです。

また、忘れられない思い出のひとつに、今はこの園から姿を消した会集のことがあります。

時間になると、先生の弾くピアノの音に合わせながら、ちょうになったり花になったりしてゆうぎ室に集まりました。そして出席の確認のあと先生のお話をきいたりうたやゆうぎをしたり、時には人形劇や映画をみせていただいたものでした。

それはそれなりに私たち当時の園児にとって、楽しく懐かしい思い出の一こまです。

しかし現在、当園では会集という行事で幼児の生活を区切ることはしません。

登園した子どもたちは、おもいおもいに好きなあそびをいたします。そして教師は幼児の状態をみながら、しぜんに次の活動へ方向づけるような指導が行なわれています。この園のあゆみと共に、保育形態にも変遷があったということでしょうか。

（吉田和子記）

戦時中の思い出

最近になって雑誌や放送によくとりあげられる話題にこんなのがあります。

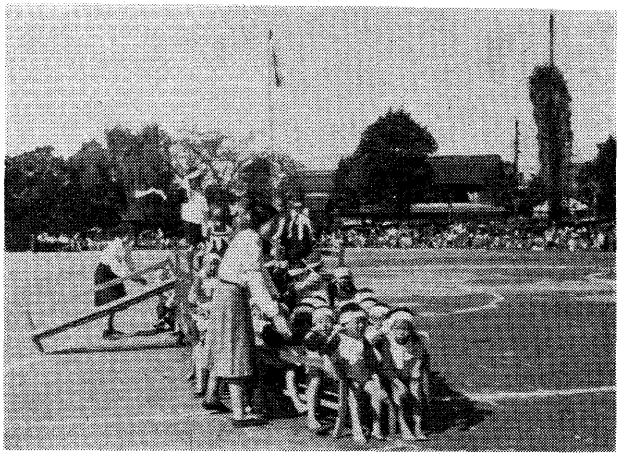
「あなたは昭和十六年の十二月八日に何をしていましたか」私にとってそれは昨日のことのようにおもえますのに、もはや歴史のひとこまとなりつつあるのでしょうか。

あの日幼稚園の先生になって二年生の私は、ちょうど出張で不在の主任の留守を守って幼児と共に幼稚園にいました。

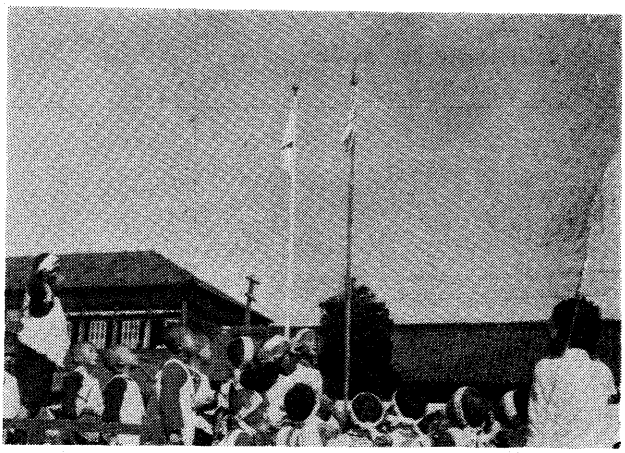
「いよいよ大きな戦争が始まったのね、しっかりしなければ。」今おもえば何をしっかりするのかよくわからないのに、他の先生方どこぶしをにぎりしめながら話し合ったものでした。それから日を加える毎に戦争は激しさを加え幼児の保育も本式に戦時保育にきりかえられていきました。

「いまに大きくなったら何になるの」という問いに対して幼児たちは胸を張って、男児は「予科練、特攻隊、あらわしの部隊長」女児は「赤十字の看護婦さん」などというようになりました。遊具にも鉄かぶと、鉄砲などが好んで使われ、子どもたちの遊びも勇気や耐久力をためすような兵隊ごっこや、高い所から、とびおりる落下傘ごっこなどの遊びがはやりました。遊戯室の長椅子を

庭に作った長椅子の軍艦



軍艦旗に敬礼



つみあげて軍艦にみたて大平洋行進曲をうたいながらおおいに日本軍の勝利をよろこんだこともあの頃のおもいでのひとつです。（写真参照）

もちろん保育内容にも戦争に関係のある歌や遊戯お話などがたくさんとりあげられるようになりました。

また手技などは古新聞、古葉書などを利用することで物資の不足をおぎなう努力をしたものです。

こまかくした新聞紙を水でとかし、ふのりを加えそれで地図の形をつくり、日本軍が勝つたびに小さな日の丸を立てていく製作などもあの頃のものとして記憶に残っています。

戦争は外から内からいろいろな形で幼児の世界にはいりこんできたのです。

私たちは戦時下の幼児教育をどうしたらよいかということで考えたり、話し合ったり恩師に教えをこうたりしたものでした。

前橋に倉橋先生をお招きしたこともありました。先生のお話の中で今でも心に残って忘れられないのは、

「幼児たちに国家の一大事である戦争を知らせるのと一緒に、戦時中だからこそ、やさしみやうるおいを与えることを忘れないように」とおっしゃったことです。

私たちは先生のお言葉を心に銘じこの時代を歩いたのでございます。

そのうちに最初はかちいくさだった戦争も、東京空襲がはじまるようになってからは段々に不安な様相を呈するようになりました。

保育中に空襲にそなえて待避訓練まで行なわれるようになり、小さな手で耳や口を押えて床に伏せをする幼児の姿は幼いながら、けな気なものでした。

私は一身上の都合で幼稚園に心を残しながら戦争さなかに一時退職をしましたがその間に私たちの園も空襲にみまわれてしまったのです。

（鈴木正子記）

空襲全焼

群馬大学の大世帯の中で、空襲全焼の憂き目を見たのは、わが幼稚園だけでした。最も非力で平和的な場所である幼稚園が痛手を受けたのは、あまりに皮肉な運命というほかありません。十余年の蓄積が形有るものはすべて灰になり、振り出しに戻らざるを得なかったのでした。

戦局の切迫につれ内地爆撃がはじまり不安がせまってきました。防空ずきんを被って登園し、警報が出れば直ちに各方面に手分けして送り、帰宅させるようになりました。

焼け跡の幼稚園で

二十年七月ころからしぜん休園になりました。園児を避難させるための防空壕も園児がいなくなって不要になったので、保育用品の紙芝居・人形芝居・絵本・蓄音機・レコード・用紙類などを壕に入れました。ところが、女子師範学校

生徒用の壕が水浸しで使用不能のため、幼稚園の壕を提供してほしいと頼みがありました。人命にはかえられないと、一たん納めた用品資材を取出し園舎内に戻した夜空襲にあい、全部焼いてしまいました。生徒にけがの無かったのだけが、なぐさめでした。

その日、八月五日は午前中から警報が頻々と出たので、防空服装で警備にあたり、女子師範学校生徒も共に警戒にきていました。敵機の焼夷弾のため所々に火災が起こりその火花が園庭にも散りはじめました。椅子のふとんをプールの水に浸してたたき消しました。やがて隣家に火の手があがり接近している遊戯室に延焼し、またたく間に全焼してしまいました。全く手の施しようもない火の勢いでした。被災当時の園務日誌をみると、

八月十一日　焼跡の整理。仮小屋を作ってもらうことを頼む。
八月十二日　焼跡の樹木の整理。
八月十七日　焼けた金物とりまとめ。
八月十八日　埋蔵物品を掘り出し陽にあてる。整理の上、一部をやけのこった隣家に保管してもらう。
九月十一日　便所を仮設。（写真・園務日誌）
九月十二日　水道修理。園庭の地ならし。水たまりに盛り土をする。
九月二十五日　焼トタン板のばし。

青空幼稚園　九月開園

前橋市の大部分がやけただれ衛生状態も悪く遊び場もない、この際こそ子どもを守らねばと焼跡に開園しました。まだ疎開先から戻らぬ者や、住む家のない子もある時です。疎開先で病死した子も一人ありました。登園したのは少人数にすぎなかったが割合元気で集まりました。焼跡の庭にあるものは、ベビーオルガン一台、ぶらんこ、鉄棒それだけです。でも子どもは遊びを自分で発見します。焼跡から掘り出したもので、玩具を作って楽しみました。雨の日は欠席が多かったので、お天気幼稚園という名がうまれました。雨具がないのです。一つの傘に学校の兄姉と肩をよせ合って入る子ども、ずぶぬれ、はだしさえありました。

借り家幼稚園のくらし

女子師範学校の弓場を借りて雨をしのいだこともありました。やがて寄宿舎の一部を借りることになったので、雨の日でも保育できるようになりました。疎開先から子どもが帰ってくるにつれて、せまい一室はすし詰めになりました。体操場のあいている時は、そこへ行って遊ばせましたが生徒が入ってくれば直ちに引揚げざるを得ません。廊下もそっとそっと歩かせ、足音をしのばせて歩くことも経験しました。お湯をわかすのに、たき木をひろい集めてこんろで燃やし、まっ黒くなったやかんでお湯をわかした

校長　職員出勤状況

保育状況

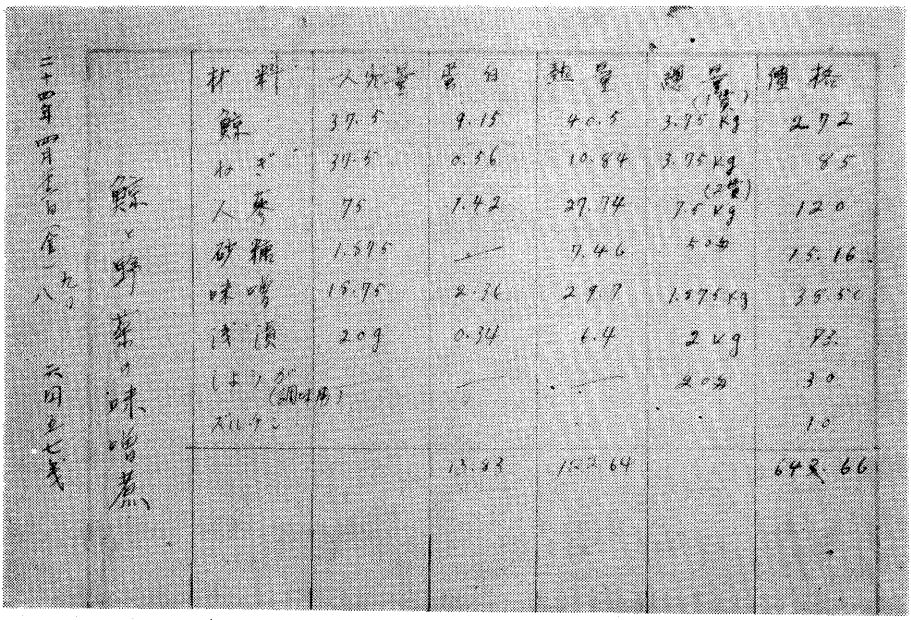
幼児

組	出席数 男	出席数 女	出席数 計	欠席数 男	欠席数 女	欠席数 計
一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
二	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
三	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

備考

来園者	用務	内外	商店	修繕	会議	事項	火気 注意 連絡	其ノ他
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

給食の献立表　（昭和24年4月22日）



材料	入荷量	蛋白	熱量	総量	価格
鯨	37.5	9.15	40.5	3.75 kg	272
わかめ	37.5	0.56	10.84	3.75 kg	85
人参	75	1.42	27.74	7.5 kg	120
砂糖	1.875	—	7.46	500	15.16
味噌	15.75	2.36	29.7	1.575 kg	355.50
漬物	209	0.34	1.4	2 kg	72
しょうが（調味料）		—		200	30
スルチン					10
		13.83	152.64		642.66

鯨と野菜の味噌煮

二年四月廿二日（金）八ヶ　六月廿七日

のも、思い出の種です。

（前主任教諭　林こと記）

復興の努力

焼失園舎の復旧は困難をきわめました。罹災直後に保護者篤志家から尽力の申し出がありましたが、保護者の大部分が罹災している時です。申し出を遠慮して辞退しました。国立ですから国で何とかしていただけるものと期待していました。しかし年度が改まっても、何の気配もありません。文部省にたずねても、早急な助けは得られませんでした。焼失一年後の九月に篤志家の単独寄附で一棟建ち、復旧のいとぐちとなりました。このあと続いて後援会の力を結集して三保育室をたて寄附しました。二十三年十一月には給食調理室を建てユニセフ援助物資を受けて、子どもの栄養補給をはかりました。二十七年秋、群馬大学期成同盟会の力により遊戯室の竣工を見て復旧は一応完成いたしました。

（前主任教諭　林こと記）

創立以来約二十年間の歩みは、よろこびと苦難に満ちたものでした。しかし、この記録を書き残すに際して、先輩も現職もみな健在で各人がその一こまを担い、途絶えることなく書き続けられたのは、何よりもしあわせなことといえましょう。